S.Ashina

＜古代キリスト教から中世、そして宗教改革。後期＞

オリエンテーション
１．ゲルマン民族とキリスト教
２．キリスト教修道制
３．中世キリスト教世界のダイナミズム
４．キリストと文化――スコラ的文化総合 10/27
５．自然神学の諸問題 11/10
６．研究発表（角元） 11/17
７．研究発表（金） 11/24
８．研究発表（長岡） 12/1
９．研究発表（山本） 12/8
１０．イスラームと１２世紀ルネサンス 12/15
１１．フィオーレのヨアキムと歴史神学 1/12
１２．宗教改革と近代世界 1/19

＜前回＞中世キリスト教世界のダイナミズム

（１）中世社会の構造と動態

１．中世社会の力学：教会と王権（教皇と皇帝）、都市と農村、キリスト教とイスラーム
２．キリスト教のダイナミズム：イエス運動の宗教理念＋制度化
３．中世社会の変動と新しい宗教性の展開：下部構造から上部構造？
・農業革命　→　都市の発展　　・都市民衆の宗教性
・異端的民衆運動と教会の対応：十字軍、新しい修道院運動、異端審問制度。

（２）中世都市とキリスト教

４．古代都市（ヘレニズム都市）との関係→地域的多様性、新しい「地域的中心」
５．土地の開墾・技術改良による農業の集約化と生産力の増大。人口増加、農民や手工業者が近隣の都市的定住地へ移動。都市のネットワーク、同盟（ハンザ同盟など）の形成。
　宗教改革期には、ヨーロッパ諸都市には、思想レベルでの独自のネットワーク（寛容のネットワーク）が存在。
６．「文化としての都市」「ヨーロッパ中世都市がキリスト教という宗教を軸にまさしく新たら都市空間をつくりだしたという点」（河原、7）→都市の両義性。
７．「市民」の登場：都市の自由と自治を享受し担う主体。
８．都市の暦（守護聖人の祝祭など多様な祭礼と宗教儀礼）→演劇空間としての都市
　公共時計の出現、時間の秩序化（→近代へ。アンソニー・ギデンズ）

（３）教会と王権

９．宗教と政治の相互補完性、統合体内部での緊張関係。
　この関係性を支え、それを表現していたのが儀礼・象徴体系。
10. 教皇権の確立（ビザンチンに対して。国家に対して）と集権化、王権の確立と集権化。
　この二つの動向の重なり。聖職叙任権闘争.
11. 紛争解決の手段としての儀礼。「中世をつうじて、とくにその初期から盛期にかけて、支配者層の間での紛争解決に頻繁に援用された「仲裁」」「「降伏」儀礼」（池上、11）。
12. 階層的宇宙（自然から超自然・恩恵へ。サクラメンタルな宇宙）の中で、各階層を結び付ける象徴と儀礼が機能し、それが社会秩序の安定化を可能にする。
　「可視的ものを通じて不可視的ものへ」（per visibilia ad invisibilia）
13. まとめ
・宗教と政治、教会と国家という単純な二分法は、議論の出発点としては意味があるが、

大きな限界がある。
・象徴体系・儀礼から、中世的秩序を分析する。→　文化人類学的キリスト教学の可能性。
言語・象徴論からのアプローチ
・歴史的現象（実在と出来事）→　類型構成
→　段階論、要素・構造論、あるいは両者の統合

４．キリストと文化――スコラ的文化総合

＜ポイント＞
・中世世界の安定構造としてのスコラ的文化総合
・象徴・儀礼によって構成された階層的宇宙

（1）宗教と文化

1．「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）
キリスト教と世俗文化との関係性をめぐっては、これまで多くの議論がなされてきたが、ニーバーの類型論はその古典的な研究といえる。
断絶・対立（テルトゥリアヌス、トルストイ）
／中間（差異を前提とした関係付け。
階層性：スコラ的文化総合
緊張：ルター
回心・変革：ヨハネ、ニーバー自身）
／連続性（自由主義神学）
東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局。
キリスト教思想史・キリスト教史、組織神学、キリスト教倫理
2．スコラ的な文化総合
階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界に構造的安定性をもたらす。
存在の大いなる連鎖（神から物まで）
cf. 近代以降、近代から現代へ
3．スコラ学（13 世紀）
哲学（ギリシャ哲学）と神学：単純に区別できる関係ではない。相互連関・相互影響。
・アリストテレス（イスラーム経由）主義とアウグスティヌス主義
・ドミニコ会とフランシスコ会
↓
緊張関係
人間の魂・世界は永遠か？
神の知としての神学、「聖なる教」（sacra doctrina、トマス）
聖なる教に属する神学と哲学の一部門としてのあの神学との区別
自然神学と啓示神学、啓示神学と聖書
↓
神学の概念史における中世
4．「単に対象構成のラチオのみならず対象内容をも峻別するようになるが、トマスの「聖なる教」は、いわゆる「自然神学」に対立する意味での「啓示神学」よりも内容の範囲が広くて、いわゆる自然神学の取り扱う内容をも包含している。」（山田晶責任編集『トマス・アクィナス』中央公論社、84-85頁）
「自然の光のもとに知られうるもの」は、「啓示の光において知られうるもの」

S.Ashina

と部分的に重なる。同一の知識が、受け手の知性の段階に応じて、二つの仕方で知られる。

↓

存在と認識の階層構造

（２）中世の知的統一世界

５．二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道

神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学

人間の自然的理性（理性本性）の能力による神認識＝自然神学

６．創造論　→　世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する（知恵思想）。

→　科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為（詩編19編を参照）

７．類比（アナロギア）の論理：作品から作者への推論

神：人間＝父：子　→　神＝（人間×父）÷子

存在のアナロギア(analogia entis)

cf. アナロギアの基礎をめぐって

８．「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」（ローマの信徒への手紙 1.20）

「2　天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3　昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4　話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても　5　その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。」（詩編 19 編）

９．自然神学：世界の秩序の探求から神へ

(1)前提：　古代ギリシャの自然学と哲学的神学、旧約聖書の創造論と知恵思想

ヘレニズム的ユダヤ教：「無からの創造」の背景

(2)神の存在論証

(a)存在論的類型：アンセルムス、デカルト、ヘーゲル　→　次回

(b)宇宙論的類型：トマス（５つの道）、ニュートン、人間原理

・経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・運動・変化の存在／「原因―結果」の連鎖／第一原因

→これを神と呼ぶ

何が問題か？　哲学者の神？

神の存在論証とは、その意図は？

10．中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

↓

・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

・実在の構造／知識の構造／大学という制度的な構造

＜参考文献＞

１．ヘルムート・H・ニーバー　『キリストと文化』新教出版社。

２．芦名定道　『自然神学再考』晃洋書房。

３．中川純男・加藤雅人編『中世哲学を学ぶ人のために』世界思想社。

４．Ｅ．ジルソン『中世哲学の精神　上下』筑摩書房。
５．山田晶『在りて在る者』創文社。
６．Ｋ．リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。
『中世思想史』平凡社ライブラリー。
７．金承哲『神と遺伝子――遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、
100-108、225-227頁。
８．稲垣良典編『教養の源流をたずねて――古典との対話』創文社。
９．南川高志編『知と学びのヨーロッパ史――人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房。
川添信介「第九章　専門と教養――中世パリ大学の理念から」